

沢海

みるみる 沢海

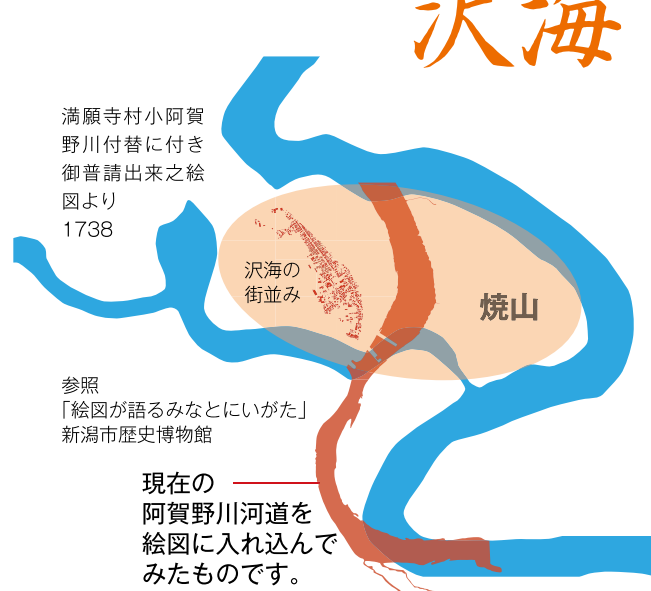
みるみる 年表

年号	西暦	主なできごと
	1596	慶長年間に作成された「御領内高付帳」～横越嶋の内訳として「相見」(そうみ)と登場する。
慶長3	1598	溝口秀勝が新発田城主となり、沢海を含む横越全域が新発田藩領となる。
慶長15	1610	沢海藩成立。秀勝の次男・善勝が初代藩主。しかし沢海村は未だ新発田藩領のまま。
寛永16	1639	陣屋(沢海城)と陣屋町完成。沢海村が沢海藩領に編入。
貞享4	1687	領地没収改易、幕府領となり沢海代官所(陣屋)がおかれる。
宝永4	1707	旗本小浜氏七代による知行支配はじまる。
元文3	1738	能代川まで通船運河を改修する「小阿賀野川堰込御普請」4か月で完工。
宝暦6	1756	沢海の百姓伊藤安右衛門の次男安蔵が分家する。(後の初代伊藤文吉)
文政13	1830	伊藤家が旗本小浜家の御用達として隆盛。
明治2	1869	版籍奉還により旗本小浜氏の終焉。陣屋跡地に光圓寺が移転する。
明治15	1882	伊藤邸建築工事着工(明治22年完成)
明治38	1905	宅島林造を招聘し養蚕業伝習所「大成社」開設。中蒲原を代表する良質な蚕種の生産地となってゆく。
大正4	1915	阿賀野川改良工事着工(～昭和8年)
大正13	1924	沢海地区の阿賀野川新河道が通水、焼山地区は対岸となり、渡し船運行為始まる。
昭和10	1935	沢海開田工事着工(昭和11年竣工)、沢海だけでも12倍の田地に増える。
昭和21	1946	七代伊藤文吉、博物館をつくり財産の総てをこれに寄付する。(現・北方文化博物館)

発行：沢海まちあるき実行委員会  文化庁
〒950-0205
新潟市江南区沢海2丁目15-25
(一般財団法人北方文化博物館内)
TEL.025-385-2001 FAX.025-385-3929
nclm2006@vanilla.ocn.ne.jp

平成26年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館活動支援事業
出版・参照：「横越町史」、「沢海城物語」(角田夏夫著)、「絵図が語るみなとにいた」(新潟市歴史博物館)、「沢海城下絵図」(北方博物館蔵)

日本の大河、 信濃川と阿賀野川の舟運を 使える政経の適地に つくられたまち



越後平野を貫く大河、阿賀野川と小阿賀野川の流れに挟まれた、ゆるやかな高地があります。戸数三百戸余りの集落が形成され、古来「沢海(そうみ)」と呼ばれてきました。沢海の歴史は地理的要因を抜きに語れません。二つの河の分岐点で、会津や新潟方面への交通にも便が良い要衝の地でした。横越島(亀田郷)で最も海拔が高く、阿賀野川によって運ばれた肥沃な土壌は、全国的にも有名なトウモロコシや、根菜類など美味しい野菜を育みます。戦前には県内有数の繭の生産高を誇っていました。

沢海城下町が輝いた 江戸前期

1639-1687

御殿



慶長15年(1610)初代新発田藩主・溝口秀勝の逝去に伴い、領地を譲り受けた次男・善勝は1万4千石の大名となり沢海藩を立藩します。その居城として完成させたのが「沢海城」でした。場所は現在の阿賀野川堤防付近です。当時の川の分岐点から西方の地点にあり、交通の要衝であること、また横越島で最も標高が高く水害を受けづらいことから選ばれました。しかし城といっても外堀がなく、屋敷構えであったと推測され、住民は今でもこの辺りを「御殿」と呼んでいます。

旗本・小浜家の領地

1707-1868

知行所



77年間栄えた沢海藩は貞享4年(1687)に改易され溝口家は断絶します。その後20年間、沢海の町は幕府領となりました。越後は出雲崎にしか代官所がなかったため、沢海に出張陣屋「沢海代官所」が新たに作られます。現在の光圓寺の位置です。宝永4年(1707)、摂津国より徳川旗本の小浜行隆が移されてきます。沢海を含む6千石が小浜氏の知行支配となり、代官所だった建物がそのまま陣屋となりました。小浜氏の支配は明治2年(1869)の版籍奉還まで続きました。現在の光圓寺は小浜氏の陣屋が廃された後に移転してきました。

明治、豪農の城づくり

豪農



宝暦6年(1756)沢海は旗本小浜氏の時代。百姓伊藤安右衛門の次男安蔵が、一町二反九畝二十九歩(約1.3ha)の畑をもらい20歳で分家、百姓のかたわら藍の商売を始めます。これが沢海から広がる豪農伊藤家の始まりでした。天保8年(1837)息子安次郎の頃には小浜氏の御用達へと成長を遂げ「伊藤文吉」を名のります。その大邸宅は8年の工期で明治22年(1889)に完成しました。昭和期には田畑1,370町歩(1,372ha)を所有する越後随一の大地主でしたが、農地解放により現在は北方文化博物館として公開されています。

歴史が残る まちなみの謎

地形

中世以来、沢海地区を含む横越島に定住してきた人々は阿賀野川の増水に伴う小阿賀野川の氾濫や堤防の決壊で被害を受けてきまし



大榮寺 だいえいじ daieiji

多くの名僧を輩出した曹洞宗選仏の大道場で、今日も北越研修道場として一般参拝者のために門戸が開かれています。寛永8年(1631)三つの寺を統合し大榮寺として開山しました。沢海城主である溝口家のお墓があり、桜の名所としても有名です。境内の芭蕉の句碑は、沢海の俳諧愛好家の方々が文政年間に建立したものです。



光圓寺 こうえんじ kouenji

光圓寺は真宗大谷派のお寺です。元々は享禄2年(1529)に瀬波郡本庄(現村上市)に創建。寛永6年(1629)沢海初代藩主・善勝の時代に沢海へ転住し、明治2年小浜氏陣屋の民間払下げに伴い、現在地に移りました。境内には、沢海城から移植されたと伝わる樹齢300年の老榎がありました。

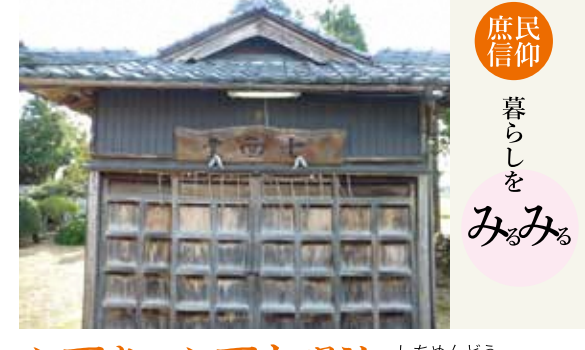
た。沢海の焼山地区がこぶ状の形で阿賀野川に突出して壁になっていたので、川は大きく蛇行し、増水時には7割の水量が小阿賀野川に流れ込みました。大正2年(1913)の「木津切れ」では阿賀野川氾濫と小阿賀野川氾濫に伴い、下木津地区が破堤。この水害を契機に本格的な阿賀野川改修論が高まります。大正4年に阿賀野川改良工事施工が告示され、特に沢海地区で大きく蛇行する河道を直すための新河道開削工事が決まりました。

大正7年に着工、13年に新河道が通水しますが、これにより沢海は分断され、焼山地区が対岸となってしまいます。焼山地区に耕作地をもっていた住民たちは移住せざるをえず、大変な苦勞がありました。こうして現在の阿賀野川の流れができあがります。昭和3年には小阿賀野川満願寺呑み口に「小阿賀閘門」が竣工、また急流で河床が削られ兩岸が決壊せぬよう、昭和4年と6年に「床固め工事」が行われました。



日枝神社 ひえじんじや hiejinja

古くから沢海の上と下にはそれぞれ山王社と諏訪社があり、他に神明宮、熊野十二社をあわせて6社もありました。しかし沢海藩改易後から各社殿は荒廃したので、下の山王社に全てを合祀し、沢海の鎮守は山王社とされました。日枝(比叡)神社の名は明治3年に越後府の社寺取調掛・小池内広が命名しました。



七面堂・七面大明神 しちめんどう しちめんだいみょうじん

昔から沢海村では河川流域で恙虫に刺され死亡する人が多くいました。天保6年(1835)は死者9人に達し、村人は妙善寺14世日周上人に毒虫退散の祈禱を頼みました。上人は本尊である吉祥天女像を授け、秘文を唱えると不思議に恙虫の害は減りました。七面堂は同9年毒虫鎮守七面大明神を祀って建立したと伝えられます。



庚申堂 こうしんどう

庚申講は江戸中期から沢海の代表的な民間信仰の一つで、特に青面金剛を本尊とする仏式が横越地域全体の特徴です。沢海の庚申塔は「明和四年」(1767)と彫られています。また青面金剛絵図像は「文政二年」(1819)と記されています。60日ごとの庚申(かのえさる)の日、講中の方々は魚を口にしません。



下のお地藏様 しものおじぞうさま

明治42年の沢海大火の時、ひとり水をかぶり火消しに努めていた人がいたそうです。あれは誰だと住民が後をつけると、水にぬれた足跡がお地藏様の前で途絶えており、みるとお地藏様のお衣がびしょ濡れしていました。「お地藏様が村を守って下さる」住民はいまも毎日お参りを欠かしません。台座には天保三壬申蔵とあります。

